

## ハイディ（第十回）

津田芳雄譯

### 九、ゼーゼマン氏のお歸り

それから二三日たつて、クララのおうちでは、お父さまのゼーゼマン様がお歸りになつたといふので、うち中がごつた返してゐた。ゼーゼマン氏はいつもざつさりお土産を持つて歸るのだつたが、この日も、セバスチャン・ティネッテは、てんてこ舞ひをしながら、いくつもの荷物を、馬車からお座敷へ運んでゐた。

ゼーゼマン氏はまづ何より先きに、クララの顔を見に行つた。ゼーゼマン氏には目に入れても痛くない娘であり、クララには世界中で一等等しきなお父様なので、父娘は久しぶりの對面で、ほんとうにうれしさうだつた。それから、遠慮して隅っこに引つ込んでたハイディにも、ゼーゼマン氏は手を差し出して、やさしく云つた。

「やあ、これがうちのかあいゝスキス娘さんだね。こつちへ来て、握手しておくれ。よし、よし。  
さうだね、クララさんは仲よくしてゐるかね。それとも、喧嘩して、泣いて、仲なりをして、又喧嘩をやり始める、つていふのかね？」

「いゝえ、クララは、いつだつて親切ですね」

ハイディは答へた。

「ハイディだつて、一ぺんも喧嘩なんかしかけた  
クララもせき込んで云つた。

「よし、よし。それでお父さまも安心だ」

お父様はさう云つて椅子から立ち上り、

「クララ、ちよつと御飯をたべて來るよ。今朝からまだ何にもたべてないんだからね。あさでさつ

さりお土産をあげるよ」

食堂では、ロッテンマイアさんがお膳立ての監督をしてるたが、ゼーゼマン氏が食卓につくと、なにか大變な不吉なこゝでもありさうな顔をして、

向ひ側に腰をおろした。

「一體さうしたのです、ロッテンマイアさん。ひざくむづかしい顔をしてるますね。何かあるのですか。クララはなか／＼機嫌がいゝやうですが」

「ゼーゼマン様」家政婦はもつゞもらしく云ひ始めた。「實はクララさまに關したこゝでござりますが、わたくし共は大變なまやかしをつかまされま

した」

「ほゝう、それはまた、さうしてます」

ゼーゼマン氏は落ちついて葡萄酒を飲みながらたづねた。

「御相談申し上げました例のクララさまのお相

手は、わたくしは何でも、お行儀のよい、育ちのよい子供が欲しいと存じまして、それには、よく小説なごにござります、まるで清らかな山氣の中からでも生れ出たやうな、人間の土なき踏んだっこもないやうな、スキス娘がよこ存じまして」

「しかし、いくらスキス娘だつて、そこからへ行くには、人間の土も踏まねばならないだらうぢやあ

りませんか。でなければ、足の代りに、羽でも生えてるなければならないわけですからね」

「まあ、ゼーゼマン様、わたくしの申し上げますのは、汚れを知らぬ高い山の中で育ちましたものは、下界へ参りましても、きつこ別世界から舞ひ降りた、何かの精のやうに、清らかなものかと存じまして、といふ意味でござります」

「だけだ、そんな、何かの精みたいなものに舞ひ降りて來られたんぢや、クララも仕方がないでせうな」

「わたくしは冗談を申し上げて居るのではございません、ゼーゼマン様。ほんたうに、笑ひごとにではございません。侮辱され、まやかしをつかまされ、わたくしは始終ギョッときさせられて居るのではござります」

「さうしてです？。何が侮辱ですつて。あの子には、別にギョッときすることはないやうですが」

ゼーゼマン氏はしづかに云つた。

「あなた様は、あれのいたしました事を、何も御存じないからでございませうが。へんな人間をつれて参りましたり、いやな動物を持ち込みましたり。——先生が何もかも御存じでござります」

「動物？はて、動物とはどういふこゝですか？」

「全く御想像のほかでござります。時々氣がへんになるのださしか思へないくらい、あの子のいたしますことは、無茶ばかりでございます」

ゼーゼマン氏は、ロッテンマイアさんのいふことを、さして氣にも留めずに聞いてゐたが、勉強相手が氣がへんださあつては、娘に影響すること故、捨て置くわけに行かなかつた。だが、まさか氣がへんなのは、この婆さんの方ではあるまいな、向ひ側に坐つてゐる家政婦を、ちらこたしかめて見た。その時、戸が開いて、先生が見えたこれが取り次がれた。

「丁度よいこゝろです。どうかおかけ下さい」

ゼーゼマン氏は先生に椅子をすゝめた。

「コーヒーを如何です。——あ、どうかもう、御挨拶は抜きにして。こゝろで、娘の相手に來たあの子供は、ぎんぐ工合でせう。動物を持ち込んだり、氣がへんになるといふこゝですが、一體さういふのでせう」

先生はまず第一に、ゼーゼマン氏に御歸宅のお喜びを申し上げるためにこの部屋に立ち寄つたことを、云ひたがつたのであるが、ゼーゼマン氏は

それを押し止めて、早速ハイディのこゝが聞きたいたのんだ。そこで先生は、いつものくさくしい調子で述べ始めた。

「わたくしの意見いたしましては、まづ、一方に、あの子供は幼い時から投げやりに育てられて、何等教育といふものを施されず、山上に、外界との接觸のない生活を送つて居りました爲に、多少發達が遅れて居るといふ缺點はあります。又一方に、そのやうな生活は、無下に排斥すべきものではなく、過度にわたらぬ限り、却つてある種の利益をさへ伴つて居るものでありまして——」

「いや、それはもう、それで結構ですが、わたく

しはただ、あの子が動物なごを持ち込んで、先生をひきくおさわがせしたさか、又先生は、クララの相手として、あの子を適當ごお考へになるかさうかといふこゝを、一寸お伺ひしたかつたのです」

「わたくしは、あの子供について、あなたに何等の偏見もお持たせいたくありません」先生は、又々辯じ立て始めた。「ご申しますのは、一方に、あの

子はこちらに参りますまでつゝ、非常に非文化的な生活を送つて居りました爲に、人馴れぬ行儀知らずの點はあります、又一方に、非常に秀れ

た素質に恵まれた所もありますので、全體として考へますれば——」

「いや、それで分りました。わたくしは一矢——娘が待つて居りますから」

ゼーゼマン氏は匆々にして部屋を出て、やつこのここで長談義から逃れた。クララのそばに腰をおろし、さて振り返るゼハイディがるたので、

「いゝ子だから、一寸お使ひをしておくれ」  
さいひかけたが、さしづめ何も言附ける用はない。ハイディに一寸の間部屋から出でててもらひたかつただけなので云ひ淀んだ。「えーごね——、さうだ、お水を一杯くんで来ておくれ」  
「くみたてのお水ですか」

ハイディはたづねた。

「わい、さう、うびきり冷いくみたてのをね」

ハイディはすぐに飛び出して行つた。

「さてクララや」ゼーゼマン氏は娘のそばに椅子を引き寄せて、手をこりながら云つた。

「お父さまの訊ねることに、はつきりた、よくわかるやうにお返事するのだよ。お前のあのお友達は、一體どんな動物を持ち込んだのだね。それから、ロツテンマイアさんは、どうしてあの子が時

々氣がへんになるといふのだね」

クララはすぐに、造作もなくお父さまの疑問を

解いてやつた。あの日ロツテンマイアさんはびっくりして、クララにもハイディの口走つた妙な言葉をすつかり話したこだつたが、クララにはそのハイディの言葉の意味が皆わかつてゐるのだった。クララはお父さまに、龜のこども仔猫のこどもすつかりお話しした。お山にお日様が「さよなら」するこぢや、ベーテルの山羊のこぢや、こわい大きなお山の鳥の鳴聲のこぢや、ロツテンマイアさんがてつきりハイディを氣違ひださわぎまわつたこを話すと、お父さまはお腹をかゝへて笑つた。

「それでお前はどうなんだね、あの子を歸して欲しげの？」

「いやよ、いやよ、お父さま。お歸しになつちやいやよ。ハイディが來てからは、毎日きつと何かめづらしい事が始つて、知らない間に時間がたつのですもの。せんたは、こでも退屈だつたの。それに、ハイディつて、いくらでもお話してくれるのでありますもの。」

「よし、分つた——ほら、可愛いお友達が歸つて

來たよ。おいしくみたての水を持つて來てくれたかね」

ハイディはコップを渡した。

「はい、通りのボンプからの汲みたてです」

「まあ、あんなところまで、ひとりで行つて來たの？」

クララがたづねた。

「え、あそこのは三つとも冷いのよ、でも、する分

遠かつたわ、一等近いボンプには、一ぱい人があるから、次の所まで歩いて行つたら、又一ぱいでせう、その次の通りのボンプで、やつこ汲んで來たの。そしたら、髪の白いよその小父さまが、ゼー

ゼマン様によろしくつて仰しやいましたわ」

「大探險をしたわけだな」ゼーゼマン氏は笑ひながら云つた。「だがその小父さまつて誰だらう」

「通りがゝりにわたしを見て、『コップを持つて

ゐるね、わしにも一杯のませてくれ、この水は誰を持つて行つてあげるのかね』つて云ひました。

『ゼーゼマン様にあげるのです』つて云つたら、大笑ひしながらよろしくつてこづして、それから又、おいしく召し上れ、申してくれと云ひました』

「誰だらうな、そんな親切なこづてをしたのは。——こんな小父さまだつた？」

ゼーゼマン氏はたづねた。

「やさしい、よく笑ふ小父さまでしたわ。太い金の鎖から、赤い石のついた金が又ぶら下つたのを持つていらつしやいました。それからステッキの握りにお馬の頭のついた——」

「あ、うちのお医者様だ」クララとお父さまは同時に叫んだ。そしてお父さまは、通りのボンプまでコップを持つて水を汲みに行くなんて、友達の醫者が何ぞ思つたらうご考へるぞ、をかしくなつた。

その晩、ゼーゼマン氏はロツテンマイアさんご色々家事の相談をした時に、ハイディは少しも氣がへんな所ではなく、クララも大層氣に入つてゐるから、すつこ置くことにしたと申し渡した。

「だから、いろんな點に親切に氣を付けてやつて、多少風變りな點があつても、さがめないで下さい。もしあんた一人の手に負へないやうなら、近いうちに、母がしばらく滞在にやつて来ますから、母にたのめばいいでせう。母は、あなたも御承知のやうに、人扱ひが上手ですかね」

「はい、かしありました」

ロツテンマイアさんは、さう答へたけれど、その聲の調子では、御隱居さまの助けをあまり喜ぶ様子は見えなかつた。

ゼーゼマン氏はほんのしばらくしか家にゐなかつた。一週間も経つたかと思ふと又もうパリへ發つた。クララはせつかくお父さまがお歸りになつて喜んでゐるさ、すぐ又お別れしなければならぬので、大變悲しく思つた。が、もう二三日もすれば、祖母さまが来て下さるからといふお父さまの言葉に、やつと慰められた。

ゼーゼマン氏が發つたすぐ、その言葉に違はず、御隱居さまからお手紙が來て、明日着くから、これこの時間に停車場へ馬車を迎へに寄越してくれと書いてあつた。クララは大喜びで、その夜はおばあさまの噂で持ち切りだつた。しまひにハイディもいつしよになつて、「おばあさま」「おばあさま」と云つてゐる、ロツテンマイアさんは不機嫌な顔をして睨み付けた。しかし、ハイディはもう馴れつこになつて、その睨みはあまり利かなかつた。するべく、その夜ハイディが自分の部屋に歸るところをつかまへて、自分の部屋に呼び込んで、

「わかつたでせうね」  
ハイディが腑に落ちないやうな顔をしてゐるので、ロツテンマイアさんはぢれつたさうに念を押した。それでもハイディにはさうもわからないのだつた。ペーテルのおばあさんだつてみんなで「おばあさん」と呼んでゐるのに、さうしていけないのかしら——でも、ロツテンマイアさんが、まことにわい顔をしてゐたので、もう訊ねないで黙つてゐることにした。

## 十、新しいおばあさま

翌日の夕方には、御隱居さまをお迎へする家中の用意萬端が整つた。これで見るべく、この御隱居さまは、よほざみんなから重んぜられ、尊敬されてゐる方らしい。ティネツテは帽子を新しいまつ白なのさざり換へるし、セバスチャンは、家の足臺を集めて来て、御隱居さまが腰をかけたい時にいつでもすぐに足をのせられるやうに、便利

のいゝ場所へさくばつた。ロッテンマイアさんはまた、いくら強敵が現はれたつて、長年のこの家の自分の權威は、決して侵させはしないぞさばかり、威張りかへつて、何かご監督しまはるのであつた。

さていよいよ馬車が玄關に着くと、ティネツ

ミセバスチヤンが急いで階段をかけ降り、その後

からロツテンマイアさんがおもむろに進み出て、

お客様をお迎へした。御隱居さまが久しぶりに孫ご對面なさるのによその子がそばにゐてはこの心遣ひから、ハイディは二階の部屋で呼ばれるまで待つてゐるやうにご言附けられてゐた。それで、ハイディは隅っこに坐つて、昨夜教へられたお客さまの呼び方を、一生懸命おさらひしてゐた。するご間もなくティネツテが首を突込んで、だしぬけに云つた。

「勉強部屋へ降りていらつしや」

ハイディは、お客様にはちやんごおばあさま

といふ名前があるのに、それにまた「御隱居さま」なきこいふ別の名前をつけて呼ぶなんて、きつた

ロツテンマイアさんが昨夜何か思ひちがひをして教へたのだらうと思つたけれど、それをもう一度

訊きなほすのはこわかつたので、そのまゝ勉強部屋の戸を開けると、中からやさしい聲がした。

「さあ、來ましたね。こちらへはいつてようくお

顔を見せて頂戴」

ハイディは元氣よくそばへ行つて、持ちまへの

澄み切つた聲で、さていそいばかり、

「今晚は、御隱居さまさん」

三云つたものである。

「おやおや」御隱居さまは笑ひ出した。「お山の方では、人をそんな風に呼ぶのですか」

「いゝえ」ハイディは眞面目な顔をして云つた。

『御隱居さま』なんて名前はこれまで聞いたことはありません」

「わたしも聞きませんね」御隱居さまは、又笑ひ出しながら、ハイディの頬づべたを撫でてやつた。「よし、よし子供たちはみんなわたしを『おばあさま』と呼べばいいのですよ。それなら忘れませ

んね」

「えゝそれなら大丈夫ですわ。ペーテルのおばあさん、おんなし名前なんですもの」

「まあさうですか」おばあさまは面白さうにうなづいた。それからなほも時々うなづきながら、ぢ

つゝハイディを見つめてゐた。ハイディの方も、

このお客さまは、一目見た時から、何うなくやさ

しい親切な方のやうな氣がして、大好きだつたの

で、いつまでもじつと返してゐた。ほんたうに、

このおばあさまのものは何から何までづらしく

て、さりわけ、美しいまつ白な髪の毛や、頭巾か

ら垂れた一本の長いレースが、そよ風でも吹いて  
ゐるやうにゆらぐご顔のあたりにゆれてゐるの

が、ハイディには面白くてたまらなかつた。

「そして、あなたの名前は？」

おばあさまがたつねた。

「わたし、せんにはハイディだつたのですけれ  
ど、こゝではアデライデでないといけないのです  
つて。ですから、ぼんやりしてゐないで一生懸命

」

ハイディはこの名前にはまだよく馴れてゐない  
ので、急にロツテンマイアさんから呼ばれた時な  
ど、ぼんやりしててお返事しないことがよくあ  
ることを思ひ出し、ちよつと惜げ込んで、ぱつり  
口をつぐんでしまつた。丁度この時、ロツテン  
マイアさんがはいつて來て、話に割り込んだ。

「御隠居さまも、もちろんわたくしが同じ御考へ

かご存じます。召使ひに呼ばせますにも、呼びよ  
い名前でないご困りますから」

「ですけれどもね、ロツテンマイアさん、その子  
は小さい時からずっとごハイディといふ名前で通つ  
て來てゐるのですから、わたしはその通りに呼ん  
でやります」

そしておばあさまは、その後もいつも「ハイディ」  
「ハイディ」と呼んだ。ロツテンマイアさんはそれ  
がしやくにさはつてたまらなかつたけれど、どう  
するわけにも行かなかつた。おばあさまは、自分  
の正しいと思つたことは、いつもやり通す方であ  
つたから。その上、眼のよく利く、氣のつく人で、  
最初この家へはいつた時から、どこまでも家中  
がうまく行つてゐない氣配を感じつてゐるのだつ  
たから。

翌日、クララのいつものお晝寝の時間になる  
と、おばあさまはやさしくそばに坐つてねかしつ  
けてやり、それから元氣よく體を起して、食堂へ  
行つた。そこには誰もゐなかつた。

「おや、お晝寝かね」ミヒミリ言をいひながら、  
ロツテンマイアさんの部屋へ行つて、戸を開くとロツテンマ  
イアさんがあつた。しばらく待たされて、戸が開くとロツテンマ

イアさんは、この思ひがけないお客様に、びっくりして後ずさりした。

「あの子はどこにゐますか。そして、クララがお晝寝してゐる間、あの子何をしてゐますか。それが聞きたかつたので、お邪魔しました」

「はい部屋に居ります。ほんたうに、する氣さへあれば、こんな暇に何でも出来ますのに、あの子の考へ出したり、しでかしたり致しますことは、まったく御隠居さま、こんなに身分の高い御屋敷では、もうお詫も出来ないやうな無茶ばかりでござります」

「それは無理もありませんよ。わたしだつて、あんな風に一人でほうつておかれたら、同じこゝをしでかすかも知れませんよ。あの子をわたしの部屋につれて来て下さい。美しい繪本を持つて来てるますから、あげようと思ひます」

「そこのなんでござりますよ。」ロツテンマイアさんは、全く望みはないといふ身振りをしながら云つた。「ほんたうに困つたこゝで、あの子に本なき、てんで用がないのでござります。こちらに上りましてから、こんなになりますのに、まだ『ころは』さへ見えないのでござりますよ。先生にお聞

き下さればお分りになりますが、皆目だめなのでござります。やさしい氣の長い先生ですからいゝやうなもの、でなければ、さつくに見放されてゐるところでござります」

「それは不思議ですね。あの子がそんな馬鹿な子には、わたしには思はれませんがね。さもかくわたしのこゝろへ寄越して下さい。繪を見るだけでも、喜ぶでせうから」

ロツテンマイアさんは、もつとじろく云はうさしたが、おばあさまは急いで自分の部屋へかへつてしまつた。あの俐巧さうなハイディに、少しも字が見えられないなごこは、不思議でたまらないので、おばあさまはもつまこのここについて調べてみよう考へた。しかし、あの先生に訊ねることとは止さうと思つた。正直で、いゝ人なのだけれど、あの長口上には困るので、まあ敬遠しておこうとした。